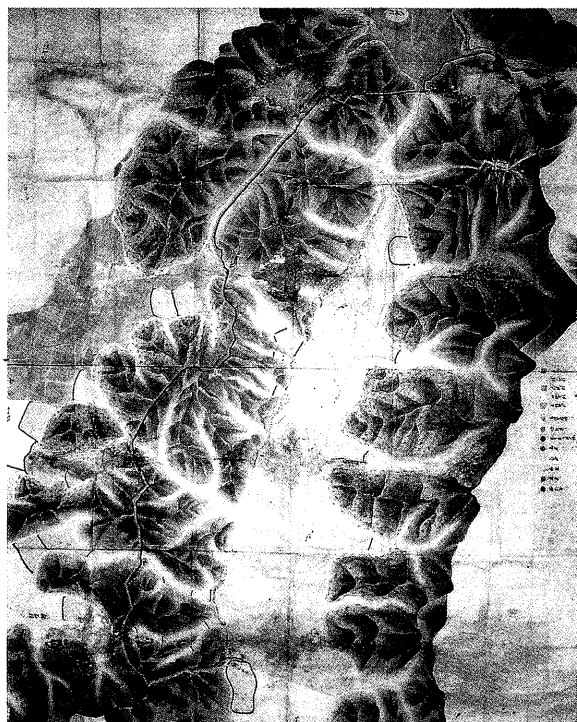




## 『伊勢校区』をたずねて

林田町の伊勢校区は、中央に大津茂川が流れる伊勢谷に発達し、大堤・上伊勢・下伊勢からなる。伊勢の名は、『播磨国風土記』の林田里の条に「伊勢野」とみえるのが初見である。同書には、当地の山の峰に伊和大神の子伊勢都比古命・伊勢都比売命がいて、その後開発が進み伊勢と名づけたとある。中世



には大堤村は林田荘内にあった。上・下伊勢村は伊勢保という荘園であったようだが不詳。上・下伊勢村は天正8年(1580)ころに黒田官兵衛が知行した。江戸時代になると、大堤村は林田藩領となるが、上・下伊勢村は複雑でおおよそ幕府領・龍野藩領(小笠原氏)・幕府領・龍野藩領(京極氏)・幕府領と変遷し、寛文12年(1672)からはすべてではないが龍野藩領(脇坂氏)となった。明治4年の廃藩置県により、上伊勢村北部と下伊勢村は生野県に、上伊勢村南部は龍野県に、大堤村は林田県に属した。明治22年大堤村・上伊勢村・下伊勢村が合併して揖東郡伊勢村となり、昭和30年揖保郡林田町、昭和42年姫路市林田町となった。

平成6年下伊勢に姫路西霊園ができ、同16年には大堤に姫路市伊勢自然の里環境学習センターが完成した。

## ◀延享4年(1747)上伊勢村隣接ハケ村荘郷境墨引絵図

上伊勢村と林田荘内の大堤・奥佐見・六九谷・松山・構・口佐見・山田・林谷ハケ村の境界の草山争論についての裁許絵図(上伊勢自治会文書)

**大堤の石仏** 大堤の集落の北西に祀られている凝灰岩製の石仏。全長40cm、横幅30cm。相当摩滅しているが両手は合掌の形で地蔵立像とみられる。中世の石仏の様相をもっている。

**庚申塔** 大堤の西の山麓にある。本来は、庚申の日の夜に信者が集まって講的な結衆が生まれ、その記念に建てたもの。陶製の祠に舟形光背に刻まれた悪疫調伏の青面金剛像が安置されている。像容は4臂の忿怒像で、頭髮は逆立ち、左手に三股文棒を持ち、右手に輪宝・絹索を持つ。庚申信仰は江戸前期ころから発達し、形式はさまざまに変化に富む。

**山伏塚** 大堤の南、字赤塚の田中にあったが今は不明。大堤の名の由来として、当村は三方が山という地形をいかして池を造ろうとしたが、堤防が決壊して失敗した。その時修験者が自ら人柱となったという話が伝わる。『伊勢誌』には、山伏が危険を察して逃げた谷を山伏谷といい、逃げる際に刀の鞘を落とした所を柄田というたとある。



大堤の石仏



庚申塔



しらひげ

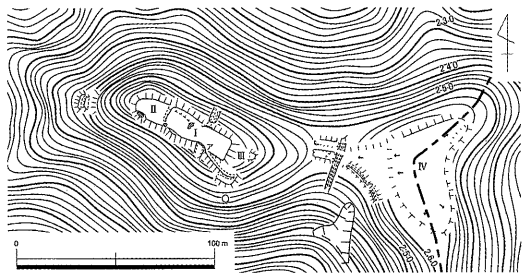
**白髭神社** 大堤字東山にある。猿田彦命を祀る。貞享5年(1688)の創立と伝わる。境内に寛政9年(1797)の御神灯や払下げられた国有地宇宮ケ谷を明治42年に開墾した記念碑がある。絵馬堂には伊勢参宮を記念した絵馬が多い。明治の絵馬師佐々木守雄や土井鶴山(継信)の名がみえる。



白髭神社

うしろぎ

**空木城跡** 上伊勢と菅生潤の境界は、飾西郡と揖東郡との境界でもある。この尾根筋の西約100mの標高約273mのピークに城跡がある。曲輪は主郭と思われる曲輪Ⅰを中心とするⅠ～Ⅲの曲輪群とその東に浅い堀切を挟んで曲輪Ⅳで構成され、東西約200m、南北約70mの規模である。『播磨鑑』によると、城主は赤松伊予守義雅の家臣喜多野新左衛門忠助とされる。『揖保郡地誌』には、嘉吉元年(1441)に赤松氏の別將小野七郎右衛門が居住したとの伝承がある。『播磨名所巡覧図絵』の「岩屋赤松遠見ノ城趾」に比定される。



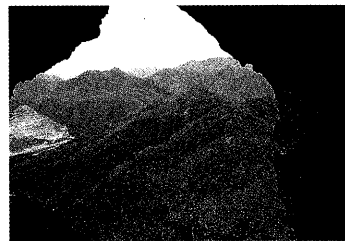
空木城跡概要図『城郭研究室年報』Vol.22一部改変



神坐の窟



窟山(いわやま)



神坐の窟から見た空木城跡

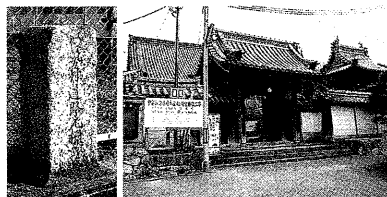
**神坐の窟** 上伊勢の東北、伊勢山の西峰にある。高さ30間(約55m)、幅40間(約70m)の天然の岩窟。『播州名所巡覧図絵』にも記述がある。岩窟奥の岩棚に不動明王・弘法大師・役行者の小さな石仏三体が祀られている。

**多賀八幡神社** 上伊勢字追谷山麓にある。創立期は不詳だが、はじめ八幡神社として菅田別尊（応神天皇）を祀る。上伊勢字湯屋谷には豊受大神を祀る多賀神社（創立不詳）があったが、明治39年八幡神社に合祀。拜殿に延享4年(1747)草山争論勝訴の記録を残すため絵図とその内容を復元して奉納している。境内に文化14年(1817)と文政4年(1821)の石燈籠や弘化3年(1846)の狛犬がある。絵馬堂に明治時代に活躍した絵馬師佐々木守雄・土井鶴山(継信)などが描いた伊勢参宮を記念した絵馬が多い。



多賀八幡神社

**道路元標** 道路の起点・終点を示す標識。「伊勢村道路元標」と刻まれている。大正9年4月兵庫県告示第225号に「表示する道路に面し、最近距離において路端に建設すべし」と、その位置が定められ、大正11年内務省令で公布施行されたもの。



道路元標

法善寺

**法善寺** 上伊勢にある。真宗大谷派。明応9年(1500)大納言伴善男から16代の孫新左衛門尉忠長（了宗）が本願寺実如より本尊と六字の名号を拝受して草庵を構えたのがはじまりという。寛永13年(1636)に寺号を長福寺としたが、のち法善寺と改名。境内の薬師堂は字薬師山にあったが明治初期にここへ遷した。鶏足寺ゆかりのお堂で今は10cmに満たない薬師如来像と大日如来と思われる像が安置されている。



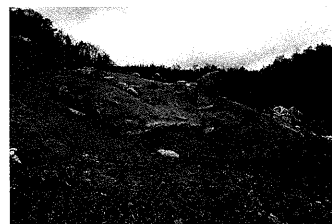
上伊勢古墳

**上伊勢古墳** 伊勢小学校の南東に接する竹藪の斜面にある。かろうじて残る横穴式石室の玄室は、奥行3.4m、幅2.2m、高さ1.6m、天井石は一枚石である。7世紀中葉から後葉と考えられている。



伴善男の墓

**伴善男の墓** 下伊勢の北西にある大池の北部に盛土した塚がある。『播州名所巡覧図絵』は伴善男の子孫が建てたものだろうと記している。伴善男の祖は大伴氏であったが、弘仁14年(823)伴氏となった。伴善男は応天門焼失の犯人として貞観8年(866)伊豆に流罪、同10年に配所で没したというのが一般説であるが、『峰相記』の記述には天慶年中(938~47)播磨国に流罪となり、「彼墓所は西川合に有る也」とあり、子孫は藤原純友追討に加わり、軍忠により当所を与えられ、開発したとある。



ドンデン2号墳

**ドンデン古墳群** 平成2年、下伊勢の西部、国道29号線北の字ドンデンで3基の方墳と1基の箱式石棺が発掘調査された。この中で最大の2号墳は、二重の外護列石を持ち、一辺約7.6m。羨道床面には切石を用い、玄門に柱状石材を用いるなど横口式石槨の一類型であろう。出土した装飾付須恵器などから、7世紀後半と考えられる。



下伊勢西山古墳

**下伊勢西山古墳** たつの市との境界、国道29号線のすぐ南の字西山で平成2年に発掘調査された。墳丘の状況や出土品の土師器壺等から、全長約33mの古墳時代前期に属する前方後円墳と考えられる。

**伝久寺** 下伊勢にある。真宗大谷派。大永2年(1522)頃、安芸国毛利氏一族の毛利元利が播磨に来て浄土真宗に帰依し、道順と号し、永禄元年(1558)当地に寺を建立して開基となる。弘化3年(1846)に焼失し、安政3年(1856)に再建。



伝久寺

**椰神社** なご 下伊勢にある神社で祭神は天照大神。垂仁天皇のときに天から十二の幡が舞い降り、その一つがこの地の椰の枝にかかり、天照大神があらわれたという。椰の元には代々葦原氏が居住していたが、あがたぬし 葦原飯照は幡の降りた十二か所に碑を建てた。安閑天皇のとき、18世の子孫飯粒いひぼが良田40町を献じ、勅を奉じて十二碑の地に天神7代、地神5代を祀った。このとき椰の大木を切った跡に天照大神を祀ったので椰神社と名づけられたと伝わる。拝殿と祝詞殿が接するところにそう古くはなさそうだが伊部焼の狛犬がめずらしい。高さ75cmで、台石には明治三十〇とある。明治時代に活躍した絵馬師土井継信などによる伊勢神宮参詣記念の絵馬が多い。



椰神社



伊部焼の狛犬

**原主葦原飯粒の墓** いひぼ 安閑天皇を祭神とする金が峯社の西に小塚があり、その上に自然石が建てられていたという墓で、飯粒の子孫の建立と伝わる。飯粒は朝廷に良田を献納したことにより郡名が粒郡と名付けられ、それが揖保郡となったという話がある。金が峯社もと下伊勢宇才ノ木にあったが、圃場整備によって跡形もなく、墓の位置も不明。当社は今椰神社内に合祀されている。



旧因幡街道と伊勢茶屋付近  
写真の手前が立場(休憩所)

**伊勢茶屋と因幡街道** 伊勢茶屋は飾西と追分(たつの市)の間にあり、旅籠や立場(休憩所)があった。享保5年(1720)『因府上京海道記』(鳥取藩主の参勤交代)によると、追分から峠の上りは「道吉」、伊勢茶屋へ向かう下りは「急也」と記している。山崎藩主の参勤交代の記録には、伊勢茶屋は中屋糸五郎といい、大津茂川は「小女郎川常ハ水少シ、多キトキハ歩渡り」とある。



峰相山鶏足寺跡の一部

**峰相山鶏足寺** 峰相山は『播磨国風土記』の林田里の条に記される「稻種山」であろうと比定されている。稻種山はすくなくひこねの大汝命と少日子根命が神前郡壱岡里からこの山をみて「稻種(稻茎つきの初か)を置くべし」といったことから、それを山に積んだところ、山の形もいなる稻積すみに似ていたのでそう呼ぶようになったとある。鶏足寺は峰相山山頂から西へ少し下がった南西の斜面あった寺で、奈良時代は大伽藍がそびえていたという。天正6年(1578)秀吉によって焼失した。伊勢小学校東南の字「大門」は鶏足寺の大門があったところといわれる。

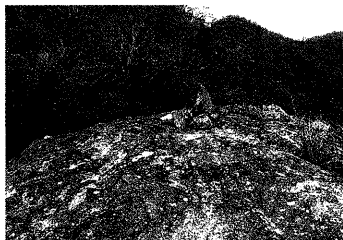


大黒岩

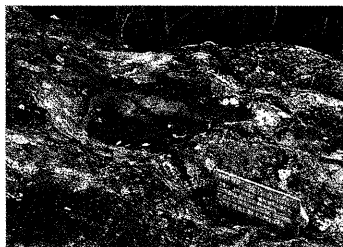
トンガリ山の亀岩



**大黒岩・亀岩** 伊勢山・峰相山の峰は伊勢層の流紋岩火山礫凝灰岩などから成り、巨岩・奇岩が多く露出している。椰神社の東、峰相山南西の標高254mあたりに大黒像にみたてた大黒岩がある。さらに南西に進むと256.7mの風早峰(トンガリ山)があり、すぐ南の下に亀岩(神岩カ)とよばれている大きな岩がある。岩全体が亀の甲羅に似ているところから名づけられたらしい。この岩にたえず水の溜まった窪みがある。『峰相記』に「高嶽ノ上、大盤ノ間、小水堪タリ」、崇神天皇のとき「香稻四本出生セリ」とあり、この稻種が全国に広まったという話はこの岩のことをいうのであろうか。最近亀岩はトンガリ山山頂近くの岩であるという話もある。



亀岩(神岩カ)



亀岩の水の溜まった窪み

■編集 出口隆一(姫路市文化財嘱託調査員)